



● テレビ部門・大賞

大賞を受賞したのはテレビ朝日「報道ステーション『特集 ノーベル賞経済学者が見た日本』『特集 独ワイマール憲法の「教訓」』」。プロデューサーの西田恒久さん（古館プロジェクト）は「3月いっぱい『報道ステーション』を離れ、2か月の充電後活動を再開した古館（伊知郎）にとってもこの賞の受賞は新たな門出にふさわしい」と喜びを表した。



勢揃いしたテレビ部門受賞者



松原文枝ディレクターは「時代が変容しているなか、このような番組や特集が大賞を受賞したことが嬉しい。番組を通し、皆さんに考えていただく機会を作らせてもらったことが有難い」と思いを語った。



池田悠樹ディレクターは「番組宛てに3000を超える反響が寄せられ、その約8割が好意的なご意見でした。あらためて視聴者はこういうものを求めているんだとわかったし、私たちにも自信になりました」と語った。



チーフプロデューサーの藤岡信夫さんは「古館さんの最後を飾るのにふさわしいテーマ、今発信しておかなければならないテーマを探しました。ただ、後任の富川（悠太）も同じ精神でガンバってます」と述べた。

● テレビ部門・優秀賞



日本放送協会「ETV 特集『書きかえられた』沖縄戦～国家と戦死者・知られざる記録～」の小川海緒さんは「沖縄戦に関する出来事の中でもタブー視されている部分だったので、取材は困難を伴った」と語った。



日本テレビ放送網「NNN ドキュメント『15シリーズ戦後70年『南京事件 兵士たちの遺言』』」の清水潔さんは「一度でいいから、付度の『そ』の字もない番組を作ってみたかった」とその意気込みを見せた。



テレビ東京「家、ついて行ってイイですか？」の高橋弘樹さんは「一人のディレクターが一晩で数十人の方に声をかけても、結局どなたからもOKがもらえないこともあった」と制作の苦労を振り返った。

GALAXY AWARDS

第53回ギャラクシー賞贈賞式



ギャラクシー賞の第53回贈賞式が6月2日、セルリアンタワー東急ホテル（渋谷）のボールルームで開催された。集まった放送、広告、報道、芸能関係者は約600名。審査された作品は、テレビ部門、ラジオ部門、CM部門、報道活動部門を合わせて753本。各部門の入賞作が表彰され、そこから「優秀賞」「大賞」の栄誉に輝いた作品が発表、トロフィ「バードマン」が贈られた。この他、テレビ部門の「個人賞」「特別賞」、本年新設された「フロンティア賞」、ラジオ部門の「DJパーソナリティ賞」、そして「志賀信夫賞」「マイベストTV賞」が表彰された。



ギャラクシー賞のトロフィ「バードマン」



司会の上柳昌彦さん（ニッポン放送）と望月理恵さん

ラジオ部門



ラジオ部門・DJ パーソナリティ賞 萩上チキ

ラジオを主戦場にさまざまな情報を発信し続ける萩上チキさんがDJ パーソナリティ賞を受賞。「日タラジオの可能性を感じています。ラジオは情報の最前線にして最終防衛ラインだと思い、毎日、伝えています。ラジオと一緒に、リスナーと一緒に、私もパーソナリティとして育ってきたい」と抱負を披露。

ラジオ部門・優秀賞



中国放送の「赤ヘル1975」の増井威司さんは「カープは広島復興の象徴、共に歩み続けるものと思っています。初優勝の実況は広島“音”遺産ですから、絶対に使おうと思っていました」と制作意図を明かした。



日本放送協会「遠くなる戦争を語り継ぐ〜女性ノンフィクション作家の対話〜」の竹内京さんは「戦後70年、風化していく記憶を次の世代に引き継いでいかなければならない」と制作の狙いを語った。



毎日放送「学生に夏休みはない 2015」の原和子さんは「国会前のデモで有名となったシールズですが、あまり知られていない関西で活動するシールズがどんな言葉を紡いでいたかを伝えたかった」と語った。

ラジオ部門・大賞

憲法学者の南野森九州大学教授と元AKB内山奈月さんが、憲法にまつわる土地を訪れる九州朝日放送の「憲法で巡る日本の旅」が大賞を受賞。南野さんと内山さんも登壇し、受賞を祝った。制作にあたった佐藤雅昭さんは「固いテーマでしたが、ロードムービー的な作りで、聴取者にわかりやすく伝えることができたと思う」と語った。



テレビ部門

テレビ部門・特別賞 国谷裕子

NHK「クロースアップ現代」のキャスターとしての功績に対し特別賞を贈られた国谷裕子さんは「毎日のテーマに関する勉強も大変でしたが、何を問うべきか？ 軸を決めることに苦労しました。正直なところ『今日は乗り切れるだろうか!?』と思う日も少なくありませんでした」と23年間を振り返った。友人代表としてお祝いに駆けつけた薬師丸ひろ子さんから花束を渡され、思わず涙する一幕も。



テレビ部門・個人賞 遠藤憲一

主演ドラマ3作品における演技が評価され受賞した遠藤憲一さんは「この3作品以外にも、昨年来、数多くのドラマやCMに出演させてもらいました。この賞は、そうしたものすべてに対するものだと思っています」と関係者への感謝の言葉を述べた。また、「こんな顔をしています、実際は気の弱い男なんです」とさまざまな役柄をこなす強面俳優の素顔を告白。ビデオで祝福のメッセージを寄せた菅田将暉さんの演技力を評価し、「彼の活躍こそ素晴らしい」と共演者を讃えて“父”の顔を見せた。

「スペシャリスト」

テレビ朝日の船津浩一さんは主演の草薙剛さんについて「ふだんは飄々としているが、いったん事が起こると豹変するというキャラクターが、草薙さん本人にもかぶる部分がある。草薙さんナシでは成立しない作品だった」とドラマを語った。



テレビ部門・フロンティア賞 ティーバー TVer

民放各局のキャラクターが登場、受賞を盛り上げた。チームTVerキャプテンの龍宝正峰さんは「予想以上の反響です。テレビのコンテンツをテレビ以外のメディアで視聴するという習慣が定着しつつあると感じます」とスピーチ。



志賀信夫賞

山本雅弘

毎日放送元社長の山本雅弘さんが志賀信夫賞を受賞。「放送に限らず文化というのは多元的、多面的であるべき。全国からの発信があってこそ日本全体の文化レベルが向上する。私も大阪生まれ大阪育ちの放送人として、今後も関西発の放送文化発展のためにがんばる」と挨拶した。登壇した盟友の朝日放送元社長・西村嘉郎さんは「上方演芸資料館の存続に関して共に知事と戦った仲。『地方の時代』映像祭の大阪招致にも尽力するなどさまざまな分野で放送文化に貢献した山本さんがこの賞を受賞したことは喜ばしい」と功績を讃えた。



CM 部門

CM 部門・優秀賞

「サントリーホールディングス PEPSI STRONG ZERO 桃太郎」の三好健二さん。第51回では同シリーズで大賞を受賞しており、「今回も思いきって気合いと制作費をかけてつくりました」。



「宮崎県小林市 移住促進シティプロモーション『ンダモシタン小林篇』」の村田俊平さん。「放送後、市のホームページのアクセスが10倍に、相談件数は3倍になりました」。



「早稲田アカデミー 企業『へんな生き物篇』」の村瀬厚さん。子どもたちの行動には未来につながる意味があるというメッセージに対し「多くの親御さんから『素晴らしい動画』とお褒めいただきました」。



CM 部門・大賞

日本昔話の主人公を友だちに仕立てた設定が楽しい「KDDI au『三太郎シリーズ』」が大賞を受賞。KDDIの矢野絹子コミュニケーション本部宣伝部長は「この作品はとても大衆的なCMだと思う。小さいお子様からお年寄りまで幅広い方々に『いいね』って言うていただけて、とても嬉しい」と受賞の喜びを語った。

懇親会



贈賞式後の懇親会には、民放、NHK、制作会社、広告主企業、広告会社、そしてギャラクシー賞の選考を担当した放送批評懇談会のメンバーが集い、受賞者を祝福した。祝辞は日本民間放送連盟専務理事・木村信哉さん、日本放送協会専務理事・木田幸紀さん。乾杯の音頭は東京メトロポリタンテレビジョン会長・FM東京名誉相談役の後藤亘さんで、「上から目線で与えるのではなく、制作者と一緒に悩んだり考えたりしながら賞を贈ってくれるギャラクシー賞は、とても好きな賞」と言葉を添えた。



木村信哉さん



木田幸紀さん



後藤亘さん

報道活動部門

報道活動部門・大賞



ゴールデンタイムに報道ドキュメンタリー枠を設定した山陽放送「RSK地域スペシャル メッセージ」が大賞を受賞。ドキュメンタリー班ディレクターの古川豪太さんは「地域の今を切り取って、それを後世に残す。これが山陽放送イズムです」と胸を張った。登壇した報道出身の原憲一社長は「社長になったら絶対ドキュメンタリーをゴールデンで放送してやるつもりだった。これほどの賞をもらったので、視聴率がよくなくてももうやめられない」とその思いを披露した。

報道活動部門・優秀賞



北海道テレビ放送「『子どもが多いほど保育料が値上がりした問題』を追及取材」で受賞した皆方等さんは「札幌市については、制度の不備を認めてもらうところまでいった」と放送の成果を語った。



琉球放送「戦後70年シリーズ企画『戦後70年の地平から』」の野沢周平さんは「戦争体験者が高齢化していくなか、体験を伝え、若い世代への教育などにも反映させていけるように考えた」と言う。